

県中教研 国語部会だより

第 38 号

発行日 令和5年3月
発行所 富山市千歳町1-5-1
富山県中学校教育研究会
編集責任者 津田亜希子
題 字 金山 泰仁 先生

何のために国語を学ぶのか

指導主事 住蔵 直美

「何のために国語を学ぶのか」、これは、以前、私が生徒から受けた質問です。そのとき私は、国語教育の意義とともに、「国語の授業では、どのような力が身に付くのか」と問われたように感じました。確かに、当時の私は、「生徒の資質・能力を育成する」というより、「指導内容を教える」ということに偏りがちだったように思います。

今年度、参観させていただいた授業では、対象と言葉の関係を、言葉の意味、使い方等に着目して問い直すなど、生徒が言葉への自覚を高める姿が多く見られました。その姿を見る度に、学習指導要領の国語科の目標「言葉による見方・考え方を働かせ、言葉への自覚を高めること」を踏まえた指導が浸透しつつあることを実感しました。これは、研究主題の副題「言葉に対する自覚を高める言語活動の工夫」に沿って、言葉への自覚を促す学習課題の設定や提示の工夫等、国語部会の「研究計画」に示された具体的な方策を基に、先生方が真摯に研鑽された成果であると考えます。

今後は、生徒が、根拠を明確にしたり、文章の構成や論理の展開、表現の仕方に着目したりして考えることができるよう、先生方には、「考えの形成」に関する指導事項を明らかにして指導することが望まれます。その際、学習指導要領の目標にあるように、言語活動を通して、資質・能力を育成することが大切です。

「何のために国語を学ぶのか」、ぜひ年度当初にこのことを生徒と共有していただきたいと思います。「語彙を豊かにしたい」「論理的思考力や豊かな表現力を身に付けたい」など、学ぶ目的を明確にすることで、生徒の学びの質が高まります。生徒が国語の資質・能力を身に付けることができるよう、「言葉による見方・考え方を働かせ、思考・判断・表現する言語活動」を工夫した授業改善が推進されることを期待します。

(西部教育事務所)

言語活動の充実に向けて

部長 津田亜希子

今年度は、「言葉による見方・考え方を働かせ、思考・判断・表現する言語活動を通して、国語の資質・能力を育成するための指導はどうあればよいか」を研究主題とし、「言葉に対する自覚を高める言語活動の工夫」を副題として研究を進めてきました。

第66回研究大会では、学習課題を解決していく過程で、一人一人に役割を与え、主体的に考えを形成させる「知識構成型ジグソー法」を取り入れられたり、瞬時に意見の共有や交換ができるICTを学びの道具として効果的に活用したりするなど、各地区で創意工夫ある授業が提案され、多くの成果を得ることができました。

また、新川、砺波の2地区では、授業力向上アドバイザーとして、富山大学名誉教授・奈良教育大学特任准教授の米田猛先生をお迎えし、「『言語感覚』の指導をどうするか」と題したお話を伺いました。言語能力を育成する中心的な役割を担う国語科の教師として、日頃の取組を振り返り、言語感覚を磨いていくことの必要性を改めて実感する機会となりました。

生徒にとって、言語感覚を豊かにすることは、言語に関する知的な認識を深めるだけでなく、言語活動を充実させ、自分なりのものの見方や考え方を形成することにつながります。相手、目的や意図、場面や状況等に応じて、どのような言葉を選んで表現するのが適切であるかを直感的に判断したり、文章に使われている言葉が醸し出す味わいを感覚的に捉えたりすることができる力の育成に一層努めていきたいと思います。

そのために「言葉による見方・考え方」を働かせる教材研究や指導事項を基にした明確なねらいをもった単元構想を周到に行い、「思考・判断・表現する言語活動」を工夫して設定することで、国語の資質・能力を一層向上していけるよう今後も研修を進めていきたいと思っています。

(高・志貴野中)

第 66 回 研究

新 川 地 区

(黒・清明中)

(1) 研究授業

臼井紗佳教諭が「知識構成型ジグソー法」を用いて、「君は『最後の晩餐』を知っているか」／『最後の晩餐』の新しさ」（光村図書2年）を題材に、主体的に考えを形成させる学びを提案した。

本時のねらいは、観点を明確にして「最後の晩餐」に関する二つの文章を比較し、その分析を基に構成や表現の効果を考えることであった。4月から「知識構成型ジグソー法」を取り入れ、文学的文章等の読解を行っていたことで、生徒たちは自分に与えられた役割を理解し、課題解決へ向けて、積極的に話し合い活動に取り組むことができていた。本時は同じ小課題に取り組む「エキスパート班」で深めた意見を3人の「ジグソー班」にもち帰り、意見交流

後、最初に提示されていた大課題に対する答えを導き出すという内容であった。臼井教諭の熱心な教材研究、工夫されたワークシートから日頃の指導の積み重ねが感じられた授業であった。



(2) 研究協議

協議前半では、本時の振り返りを行った。「エキスパート班」での話し合い活動では、生徒たちは、主体的に取り組んでおり、温かい雰囲気での活動を行っていたとの意見があった。しかし、ジグソー班に戻った時、班ごとに理解のばらつきがみられたことや結論の出し方に迷う姿も見られ、「知識構成型ジグソー法」の今後の課題が明るみになった。

(3) 研究協議（指導助言）

小櫻昌子指導主事（東部教育事務所）からは、研究授業について、「ジグソー活動をしている目的を生徒自身も理解しており、生徒に付けたい力が分かる授業であった。一方で、話し合いの質を高めることや生徒たちの意見の根拠が明確になっていたかどうかの検証が大切である」等の指導助言をいただいた。

永井 智里（下・入善中）

富 山 地 区

(富・東部中)

(1) 研究授業・研究発表

土屋恭子教諭が第1学年で「『竹取物語』を読んで、描かれている内容について話し合おう」という単元の授業を提案した。



場面の展開や登場人物の心情の変化等について描写を基に捉えるために、「群読」という言語活動を行った授業であった。生徒が、一つ一つの言葉と向き合いながら、自らテーマを設定しグループで群読の台本をつくり上げていく過程で、人物の行動や心情等の変化を丁寧に捉えることを目指した。一人一台端末を活用しながら、主体的に対話しつつ台本を作成する生徒の姿が際立っていた。授業者の意欲に支えられた意義のある取組であった。

また研究発表として、高木朗良教諭が「指導と評価の一体化を図る学習活動と評価の在り方」について、部員の意見を基に研究の現状を発表した。「粘り強い取組を行う側面」「自らの学習を調整しようとする側面」を見取るための学習活動の在り方や方法について、日々の取組の中から具体的な実践例を示した。

(2) 指導助言

米田歩指導主事（東部教育事務所）からは研究授業について、「群読の台本をつくるという言語活動を通して、場面の展開や登場人物の心情の変化等を読み取ることが目的である。その趣旨を貫いた授業であった。グループで意見を共有するために、端末を用いたことは効果的であった。意見を書き込むことに集中してしまう生徒もいたので、意見交換の際には『何を話すのか、何のために話し合うのか』ということを具体的に示すことが大切である」との助言をいただいた。

能瀬 明（富・山田中）

大会を終えて

高岡地区

(高・芳野中)

(1) 研究授業

舟崎美郷
教諭による
「いにしえ
の心を受け
継ぐ 夏草
—『おくの
細道』から」



では、「それぞれの句に表れる芭蕉の強い思いを捉えよう」という学習課題を設定し、俳句や文章に表れている芭蕉のものの見方や感じ方について考える学習を行った。

生徒は、「草の戸も～」「夏草や～」「五月雨の～」の三句から読み取れる芭蕉の気持ちの高まりについて班で考えをまとめ、地の文と関連付けながら発表した。さらに、舟崎教諭からそれぞれの句の解釈を深めるための発問がなされ、生徒は芭蕉の強い思いを捉えようとしていた。

(2) 研究協議 (指導助言)

グループ別協議では、「着目すべき地の文はどこか」「まとめを書かせるときに生徒にどのような視点を与えたらよいか」「どのような授業形態がより効果的か」等の視点から意見が出された。

往蔵直美指導主事(西部教育事務所)からは、生徒の実態を捉え、付けたい力を明確にしたこと、単元構想がなされていることについて、評価していただいた。課題として、発問の是非や生徒一人一人に自分の考えをもつ場を十分に確保すること、話し合いや交流の在り方について、助言していただいた。

(3) 研究協議 (ICTの活用について)

山崎佳子教諭(射水市)、井田幸佑教諭(高岡市)、三崎篤志教諭(氷見市)から、各市でのICTの活用状況の報告がなされた。

往蔵指導主事からは、生徒の学びの高まりのための有効な道具として、ICTを学習の場面に応じて適切に活用するよう助言していただいた。

野本 美香 (射・小杉中)

砺波地区

(小・大谷中)

(1) 研究授業

齋藤光利教諭が単元「自らの考えを『多角的に分析して書こう 説得力のある批評文を書く』という授業(3学年)を行った。生徒の興味・関心を高めるために、ITを用いて集めた風刺画を題材として取り上げて批評文を書く授業を計画した。その結果、風刺画のもつメッセージ性が元となって様々な考えや問いが出された。ICTの活用として、生徒一人一人が風刺画を拡大したり、共有し



たりしながら閲覧することができ、また、「One Note」を活用したことで、「問いを立てる→個人で考える→班で考える」という思考の流れをリアルタイムでスムーズに行い、他の生徒と意見を共有し、何をすればよいかも明確にして学習に取り組むことができた。参観者からは生徒同士の意見交換を行っても意見が深まらないという意見も寄せられたが、生徒が意見を交流する場の設定としてタブレットを用いたことは、自分の考えをもてない生徒にとって有効だった。

(2) 研究協議 (指導助言)

木下貴子主任指導主事(西部教育事務所)からは、

- ・題材の風刺画は、制作者の意図やメッセージが明確に伝わる画であることが重要であり、かつ、教育的配慮のある画が望ましい。
- ・意見を交流させる目的を明確にし、資質・能力の育成につながる効果的な活動を工夫する。
- ・終末の評価では、生徒も指導者も、何を学んだのか、取組はどうであったかなどを振り返り、次の学習へと生かす評価とすることが大切である。

などの指導助言をいただいた。

村中 徹 (小・大谷中)

下新川郡中教研 「文章を書く力」

本年度、入善西中学校では、北日本新聞社と連携し、文章の書き方講座を実施した。3年生を対象に、全6時間の授業計画を立てた。北日本新聞社論説委員の片桐秀夫氏と論説特別委員の高橋幸博氏を講師として、それぞれ1時間ずつ文章の書き方講座を開催した。その後、以下の計画で石川泉教諭が授業を行った。

- 第1時 講座「コラムの現場から『起承転結と文を短くするコツ』」
- 第2時 講座「文章の書き方、推敲の仕方」
- 第3時 「中学生の主張」と題し、クラス全体でテーマを検討
- 第4時 個人テーマ決定、テーマについての調査・根拠取り・2次情報の確認
- 第5時 下書き
- 第6時 推敲と清書

以上の過程を経て「生徒の視点」「書かれている事実・意見に矛盾がないか」「本当にそう言い切れるのか」の観点から生徒の作品を10点に絞り込み、講師の方々に添削していただき、新聞掲載に至った。生徒たちは、今回の講座を通し、自らの考えを大切にしながらも、読み手を意識した文章の書き表し方を学んだ。

永井 智里（下・入善中）

富山市中教研 「『主体的・対話的で深い学び』の実現に向けた授業改善を目指した評価の在り方」

「『主体的・対話的で深い学び』の実現に向けた授業改善を目指した、適切な評価の在り方」について研修を深めることを今年度のテーマに設定し、一貫した研修の実現を目指した。

6月部会では、指導事項に基づいた評価規準の設定の方法と、「指導と評価の計画」の作成についてディスカッションを行った。そこでは、以下の3点が確認された。

- ① 指導事項に基づいて、身に付けさせたい力を明確にすること。
- ② ①に基づき「主体的・対話的で深い学び」を実現する言語活動を工夫すること。
- ③ ①、②に基づいて単元を構想し、どの段階でどの評価規準に基づいて評価するかを明確にすること。

8月部会ではこれに基づいて作成した「2学期に行う単元・題材の流れ」を部員全員が持ち寄り、情報交換を行った。

研究大会（10月）と1月部会では、これを実践することで得られた成果と残された課題を確認した。

今後も「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて、指導と一体化したよりよい評価の在り方について検討が必要である。

能瀬 明（富・山田中）

射水市中教研 「言葉を意識した思考・判断・表現」

小杉中学校の長谷川茉莉絵教諭が、「論理を捉えて『モアイは語る—地球の未来』（光村図書2年）」において、「筆者が主張を支える根拠として、イースター島の文明の例を挙げたのはなぜか。」という学習課題で研究授業を行った。

生徒は、言葉を意識しながら、筆者の主張とその根拠、具体と抽象、さらにそれらの関係について整理するなど、情報と情報の関係について読み取っていた。また、具体例の効果や説得力について考えることで、論理の展開を吟味しながら読むようとしている生徒の姿がみられた。

本授業の構想にあたり、市内国語部会員がそれぞれの教材観を話し合ったり、ベテラン教員が模擬授業を公開したりした。このことは、どの部会員にも自分の指導を見直したり、より工夫したりするきっかけとなった。今後も知恵を出し合い、生徒が「これを考えてみたい」と思うような投げかけができるような授業展開を工夫していきたい。

野本 美香（射・小杉中）

小矢部市中教研 「論語の世界に親しみ、考えを広げ、深める」

5月31日（火）、大谷中学校の西智哉教諭により「孔子の言葉は令和の中学生の悩みに通用するのか」という学習課題で、孔子の言葉を自分の生活と関連付けて考えていく学習の授業研究が行われた。中学生がもつ三つの悩み「友人との人間関係の作り方」「勉強の成果がでないこと」「部活動の後輩を引っ張っていくこと」の中から、班ごとに選んだ悩みに対して、孔子の言葉を用いてどうアドバイスすればよいか班の中で意見を出し合い、班で一つの意見に絞って全体で発表した。終末には、本時の学習を通して考えたことをタブレットに入力した。

本授業は、研究主題「言葉に対する自覚を高める言語活動の工夫」について生徒が興味をもって取り組める授業であった。孔子の言葉を調べるに当たっては、小矢部市民図書館と市内の四つの中学校の学校図書館から中学生が使いやすい40冊余りの図書を集めて調べ学習を行うなど、ICT機器の活用だけでなく、本を手にとって調べる楽しさを感じられるよう工夫された授業であった。

村中 徹（小・大谷中）